

平成13（2001）年度発展途上国研究奨励賞の表彰について

アジア経済研究所は、昭和38年以来、発展途上諸国の経済などの諸問題に関する優秀論文の表彰を行ってきた。昭和55年には、「発展途上国研究奨励賞」として、この領域における研究水準の向上に一層資することを目指して、その対象を社会科学およびその周辺の調査研究事業の著作全般に拡大した。表彰の対象は、前年の1月から12月までの1年間にわが国で一般に入手できる形で公刊された図書、雑誌論文、文献目録などで、発展途上国の経済、社会などの諸問題について研究し、また分析したものである。

平成13（2001）年度は各方面から推薦された62点を審査したが、最終審査で下記の作品が選ばれた。表彰式は7月4日に当研究所において行われた。

〈受賞作〉

『近代・イスラームの人類学』（東京大学出版会）

大塚和夫（東京都立大学人文学部教授）

〈審査委員〉

委員長：川野重任（東京大学名誉教授） 委員：奥村幸広（日本経済新聞社論説委員）、高阪章（大阪大学大学院国際公共政策研究科教授）、寺西重郎（一橋大学副学長）、中兼和津次（東京大学大学院経済学研究科・経済学部教授）、原洋之介（東京大学東洋文化研究所長）

〈最終審査対象作品〉

最終審査の対象となった作品は受賞作のほか、次の3作品であった。

奥田英信著『ASEANの金融システム』（東洋経済新報社）
武内進一編『現代アフリカの紛争——歴史と主体——』（アジア経済研究所）
李捷生著『中国「国有企業」の経営と労使関係——鉄鋼産業の事例 1950年代—90年代——』（御茶の水書房）

大塚和夫著『近代・イスラームの人類学』

原 洋之介

筆者大塚氏は、アラブ・ムスリム社会において社会人類学調査を長年続けてきている。氏は、イスラームそのものというよりは、それを意識して日々の暮らしを送っているムスリムに焦点をあてる。筆者は、民族を主語・主体にした一枚岩的な文化の語り口への根源的懐疑に代表される人類学への批判を素直に受け止め、自らの研究態度を形成している。そして「いかに限界があろうとも、フィールドワークにもとづく経験主義的な情報収集はそれなりに価値がある」と結論づけている。この信念が氏の調査を支えている。

そして大塚氏は、自らの社会人類学的調査を続けると同時に、時間、空間、都市、ジェンダー、音、祭り、ネイション、友と敵、近代といった事項にてらして、現実に存在している歴史的文化的あり様としては多様な Islams 及びその中で生きている「文化」の姿をとらえる論考を書き続けてきた。本書は、そういった論考を、

「自らがその中で訓練を受けてきた人類学的見方がある程度相対化したい」という目的のもとに再配置した作品集である。従って、フィールド調査そのものの報告書というよりは、イスラームと近代という2つの概念を軸としての相関社会科学的試みの作品となっている。

「知的興奮を与えてくれる。この一言が本書の内容を言い表している。フィールドワークから得た分析を下敷きにした低い目線が良い。この低い目線のせいで、すんなりとイスラームの知的空間のなかに入り込める。断片的な各章を通読すると、イスラームを見る眼の視野が大きく開けてくる」。審査員のひとりがこう本書を評している。正直いって欧米に比べると未だ研究蓄積が少ないアラブ地域ないしイスラーム圏に関する日本の研究の活性化に、本書は大きな貢献を果たしてくれている。この点を評者としては多としておきたい。

(東京大学東洋文化研究所長)

◎受賞の言葉——大塚和夫

このたび榮譽ある「発展途上国研究奨励賞」を受賞いたすことになり、たいへん晴れがましく思っております。

拙著は、社会・文化人類学の立場から、アラブを中心とした今日のムスリム世界の諸現象を、歴史的視野も考慮しながら分析したものです。博士の学位申請論文として提出したものを原型としておりますが、収録されている論文の大半は1990年から98年にかけて、それぞれ独立した形で発表されたものです。そこで論じられているテーマ——それは本書の各章のタイトルにもなっております——は、時間、空間、都市、ジェンダー、音、祭り、ネイション、友と敵、と一見ばらばらです。しかしそれらの論考の底流には、この期間における私の研究のライトモチーフが潜んでいます。それは、危機が叫ばれて久しく、転換期にあるとされる民族誌の手法や社会・文化人類学の理論を用いて、「近代」におけるイスラームの変容——いわゆる「原理主義」もその一部です——をいかに理解するのかというものでした。それらの点は、第1章「序」と最終章「近代」で主題的に考察しました。

ところでこれまでの本賞の受賞作品の多くは、途上国の経済や政治を精緻に分析されたものです。その点において、主に宗教や文化を考察している拙著は、少々異質なものといえましょう。そのような脈絡の中に置きますと今回の受賞は、社会・文化人類学的なイスラーム世界研究が「地域研究」の一部として改めて認知されたという意味をもち、それは私個人の名譽というだけでなく、後続の研究者、とりわけ宗教を研究する人類学者たちにとってもよい励みになるもの

と思います。受賞に恥じないよう今後もいっその精進に努める決意を述べさせていただきますとともに、選考委員の諸先生をはじめ、関係者の皆様のご厚意に篤くお礼を申し上げます。

略 歴

- 1949年生まれ。
1972年 東京都立大学人文学部卒業。
1980年 東京都立大学大学院社会人類学専攻博士課程修了、東京都立大学博士（社会人類学）。
国立民族学博物館助手、助教授を経て、1992年4月東京都立大学人文学部助教授。
2001年4月 同教授。現在に至る。主たる調査地はエジプト、北スーダンなどアラブ・ムスリム社会。

主要著作

著 書

- 『異文化としてのイスラーム——社会人類学的視点から——』同文館 1989年。
『テキストのマフディズム——スーダンの「土着主義運動」とその展開——』東京大学出版会 1995年。
『世界の歴史24 アフリカの民族と社会』（福井勝義、赤阪賢と共著）中央公論社 1999年。
『近代・イスラームの人類学』東京大学出版会 2000年。
『イスラーム的——世界化時代のなかで——』日本放送出版協会 2000年。

編 著

- 『イスラームを学ぶ人のために』（山内昌之と共編）世界思想社 1993年。
『アジア読本 アラブ』河出書房新社 1998年。